【今週の注目疾患】

【侵襲性肺炎球菌感染症】

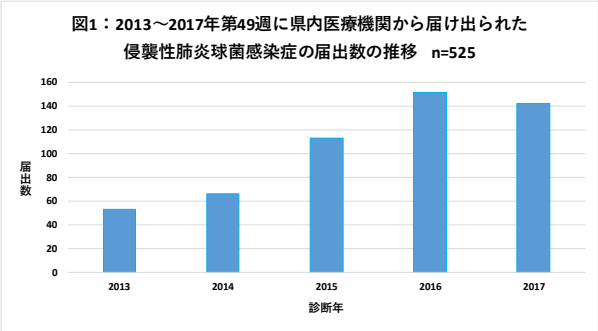
2017 年に届出られた侵襲性肺炎球菌感染症は第 49 週までに 142 例となった。本疾患のサーベイランスは、小児の定期予防接種に 7 価肺炎球菌結合型ワクチン（PCV7）が追加された 2013 年 4 月から開始された。届出数は年々増加を示してきたが、これはサーベイランスの周知や検査キットの普及といったことも影響していると考えられる。サーベイランス開始後、PCV7 から 13 価肺炎球菌結合型ワクチン（PCV13）への切り替え、65 歳以上の成人に対する 23 価肺炎球菌莢膜ポリサッカライドワクチン（PPSV23）の定期接種の開始や届出基準の変更などがあり、本疾患の発生動向への影響が考えられる。サーベイランス開始以降、県内医療機関から届け出られた全 525 例についてまとめる。

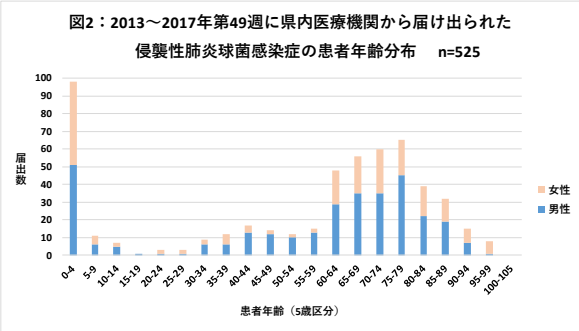
1）届出数

2013 年（4 月 1 日から）53 例、2014 年 66 例、2015 年 113 例、2016 年 151 例、2017 年（第 49 週時点）142 例（図 1）。

2）患者年齢・性別

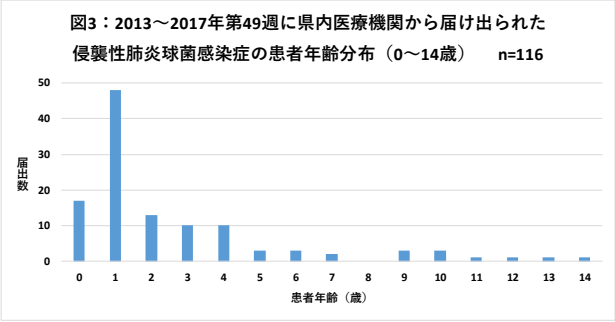
小児と高齢者の届出が多く、性別は男性318例（60.6%）、女性207例（39.4%）であった（図 2）。

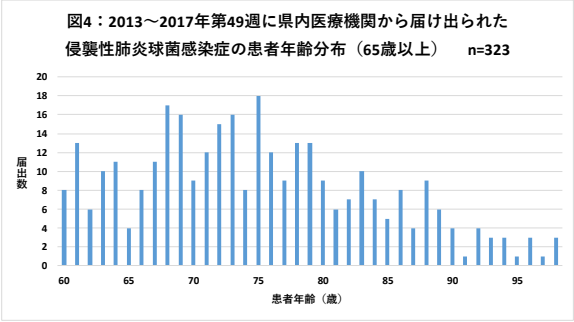




年齢により以下の 3 群に分類すると、

- 年齢群 0～14 歳、116 例：いずれの年においても 1 歳の症例が最も多かった。内訳は 0 歳 17 例（14.7%）、1 歳 48 例（41.4%）、2 歳 13 例（11.2%）、3 歳 10 例（8.6%）等となっており、0～4 歳でおよそ 85%を占めた（図 3）。性別は男性 62 例（53.4%）であった。
- 年齢群 15～59 歳、86 例：30 代以上において、30 代 21 例（24.4%）、40 代 31 例（36.0%）、50 代 27 例（31.4%）と一定の届出が認められた。男性が 63 例（73.3%）と多かった。
- 年齢群 60 歳以上、323 例：5 歳区分とすると年齢区分の上昇とともに届出が増加し、75～79 歳 65 例（20.1%）をピークとしていた。1 歳刻みとすると 65 歳や 70 歳において届出数の減少がみられる（図 4）。性別は男性 193 例（59.8%）であった。





3）症状

菌血症 211 例、肺炎を伴う菌血症 230 例、髄膜炎（菌血症を伴うもの含む）79 例、その他（関節炎等）5 例であった。年齢群 0～14 歳においては菌血症 74 例（63.8%）、肺炎を伴う菌血症 24 例（20.7%）、髄膜炎 17 例（14.7%）、その他 1 例（0.9%）であった。年齢群 15～59 歳においては菌血症 27 例（31.4%）、肺炎を伴う菌血症 41 例（47.7%）、髄膜炎 17 例（19.8%）、その他 1 例（1.2%）であった。年齢群 60 歳以上においては菌血症 110 例（34.1%）、肺炎を伴う菌血症 165 例（51.1%）、髄膜炎 45 例（13.9%）、その他 3 例（0.9%）であった。

注；《菌血症》菌血症の記載があったもの、もしくは血液から病原体検出例。《髄膜炎》髄膜炎の記載があったもの、もしくは髄液からの病原体検出例

侵襲性肺炎球菌感染症においては、ワクチン導入後、原因肺炎球菌株の血清型置換も報告されている。血清型分布を含むサーベイランスが今後より不可欠となってくると考えられる。

【インフルエンザ】

2017 年第 49 週の県内定点医療機関から報告されたインフルエンザの定点当たり報告数は 4.50 となり、前週（3.15）より増加した。県内 16 保健所管内（千葉市、船橋市および柏市含む）のうち、13 保健所において前週より報告が増加した。県レベルでの定点当たり報告数 4.50 を超える保健所は、報告の多い順に船橋市（11.53）、市原（7.09）、松戸（6.48）、印旛（6.46）、習志野（5.44）であった。第 49 週に県内定点医療機関から報告されたインフルエンザウイルス迅速診断の結果では、A 型が 76.0%、B 型が 23.9%であった（0.1%は A、B ともに陽性）。国内における直近のインフルエンザ検出状況では、AH1pdm09 が最も多く、次いで B 型（山形系統）となっている。

国立感染症研究所　インフルエンザウイルス分離・検出速報
https://www.niid.go.jp/niid/ja/iasr-inf.html